

アフリカ熱帯雨林居住民の食物資源利用の様態と生活様式類型の再検討

安岡, 宏和 / YASUOKA, Hirokazu

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

科学研究費助成事業 (科学研究費補助金) 研究成果報告書

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

4

(発行年 / Year)

2012-04

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 4 月 1 日現在

機関番号：32675

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2008～2011

課題番号：20710194

研究課題名（和文） アフリカ熱帯雨林居住民の食物資源利用の様態と生活様式類型の再検討

研究課題名（英文） Rethinking livelihood and food resource use among forest dwellers in the African Rainforest

研究代表者

安岡 宏和 (YASUOKA HIROKAZU)

法政大学・人間環境学部・講師

研究者番号：20449292

研究成果の概要（和文）：アフリカ熱帯雨林に住む狩猟採集民と農耕民の森林食物資源利用を、生態人類学的フィールドワークをとおして比較検討した。その結果、両者が利用する食物資源は大きく重複しているものの、それらの資源の運用のあり方に決定的な差異があることが明らかになった。この知見は、当該地域で現在さかんに進められている森林保全計画に反映させることをとおして、住民の生活と森林保全の両立を実現しうる計画を練り上げることに貢献できるだろう。

研究成果の概要（英文）：Based on ecological-anthropological fieldwork, forest resource uses by hunter-gatherers and cultivators co-living in the African rainforest were compared. As a result, food resources used by the two peoples were largely overlapped, but manners of resource management were definitely different between them. This knowledge will be useful to adjust the forest resource management project to *plural* local peoples' livelihoods.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	700,000	210,000	910,000
2009年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2010年度	800,000	240,000	1,040,000
2011年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
総計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：複合新領域

科研費の分科・細目：地域研究・地域研究

キーワード：生態人類学／歴史生態学／アフリカ／熱帯雨林／ドメスティケーション／森林保全／非木材森林資源／半栽培

1. 研究開始当初の背景

中部アフリカの熱帯雨林には 10 をこえるピグミー系狩猟採集民が分布している。かれらは「森の民」として知られており、社会・文化・生態については多くの研究蓄積がある。しかしピグミー系狩猟採集民が、どのような森林食物資源に、どの程度依存してきたかということは、はっきりわかっていない。なか

には、狩猟採集の産物のみによっては熱帯雨林で生活を維持できず、農作物の利用を前提として人間が熱帯雨林に住むようになったと主張する研究者もいる。こうしたなか研究代表者は、2001 年以来、バカ・ピグミーの森林資源利用に関する研究をおこなってきた。本研究に関連する成果に以下の二点がある。
(1) バカの食物獲得活動と土地利用。調査地

域には野生ヤム (*Dioscorea* spp.) が集中分布する地帯があり、そこで野生ヤムを利用することで、熱帯雨林で最も食物条件が厳しいとされる乾季の間にも、農作物に依存しない生活が可能であることをしめした。

(2) 野生ヤムの分布と人間活動との関係。熱帯雨林の中のごく限られた場所に野生ヤムが群生するパッチが形成されること、そのようなパッチが集中する地域にはかつて集落があったこと、そしてバカはときおり野生ヤムのイモの移植などの半栽培的な行為をすること、以上の三点をしめし、これらをふまえて、野生ヤム群生地はなんらかの人間活動の影響下で形成され維持されてきた可能性があることを指摘した。

以上二点から、ヤム採集はバカの森林資源利用の核にあること、さらにヤム採集は<半栽培=半野生>の領域に位置しており、狩猟採集/農耕という二項対立の枠組みでは捉えきれないことがわかる。したがってバカの森林資源利用を理解するためには人々の資源利用形態の多様性と柔軟性に注目しながら、食物資源の利用可能性 (availability) がどのように形成され、維持されてきたかを解明する必要がある。

2. 研究の目的

これまでの研究成果から、バカの野生ヤム採集は純粋な狩猟採集活動とはいいい難く、またバカの農作物栽培も完全な農耕とはいいい難いことがわかる。すなわち人々と食物資源との関係のあり方は、栽培植物か野生植物かといった個々の食物資源の性質のみによって単純に決定されるものではない。その核心を理解するためには、資源を獲得するまでに投入される労働が、資源の運用 (認知、管理、所有、流通、消費) をめぐる社会関係のなかでどのように位置づけられているかを把握する必要がある。そして、社会関係における労働の位置づけは、食物資源が存在する生態環境の特性や、それぞれの集団の文化的・社会的伝統を含む、さまざまな要因が複合的に作用するなかで形成され、変容していく。

そこで本研究では、「食物資源にたいする人々の働きかけ」と「モノのやりとりをめぐる社会関係における労働の位置づけ」との関係に着目しつつ、狩猟採集民と農耕民による森林食物資源利用を比較することをとおして、熱帯雨林における食物資源利用の共通項と多様性を解明し、そのうえで熱帯雨林居住民の生活タイプの再検討をおこなうことを目的とした。

3. 研究の方法

本研究は、中部アフリカのカメルーン共和国に住む、ピグミー系狩猟採集民バカ、および近隣に住むバントゥー系焼畑農耕民を対

象とする生態人類学的なフィールドワークにもとづいている。

4. 研究成果

(1) 野生ヤム採集と農作物栽培における、植物にたいする人々の関与のしかたの類似点と相違点を、「半栽培」のグラデーションに位置づけながら明らかにした。その結果、人間活動と森林環境とのインタラクションをとおして食物資源が形成され、消失していくという点において、野生ヤムと農作物には森林食物資源としての共通点があることを指摘した。

(2) 狩猟採集民と農耕民では、食物資源獲得のための労働投入が食物資源の運用にさいしてどのように意味づけられているかという点に、差異があることを明らかにした。一方で両者の食物資源は大きく重複していた。すなわち、狩猟採集民的な生活様式と農耕民的な生活様式との最大の相違点は、利用する食物の生物的性質や労働の先行投入の有無そのものではなく、食物資源の運用をめぐる社会関係のなかで先行する労働投入の事実がどのように意味づけられているかという点にあると結論づけた。

(3) バカの狩猟規則の機能と構造を明らかにした。バカ社会には、ゾウやカワイノシシの狩猟にさいして第一撃を与えた男はその肉を食べてはならない、という規則が存在する。ハンターが肉を食べられない一方で、その肉は人々に広く分配される。このような肉のシェアリングは、従来、贈与交換の変種として理解されてきた。しかし、バカたちの肉のシェアリングは、贈与交換とはまったく異なる原理にもとづくモノのやりとりであること、また、上記の狩猟規則は、精霊と動物と人間の関係性をめぐる豊かな想像力にもとづいて構造化されているバカたちの「生きる世界」を再生産する装置として機能していることを指摘した。

以上の成果を端的に言えば、狩猟採集民と農耕民が利用する食物資源は大きく重複しているものの、その運用のあり方に差異がある、ということである。これまでアフリカ熱帯雨林に住む人々は、漫然と「狩猟採集民」と「農耕民」として区別されてきたが、これらの研究をとおして、かれらの資源利用のあり方の類似点と相違点を明確に理解するための枠組みが得られた。なお、これらの成果は、雑誌論文5件、編著書2件、および学術図書掲載論文11件として公刊された。

また本研究をとおして明らかになった今後の課題として、以下の点をあげることができる。すなわち、現在、当該地域にてさかんにすすめられている森林保全計画において、住民の生活と森林保全の両立を達成するために、人々の資源利用に関する知見を、どの

ように活用できるかという点である。とりわけ本研究では、同じ地域に住んでいる狩猟採集民と農耕民の資源利用における差異が明らかになったが、このような地域住民のあいだにみられる資源利用のあり方の多様性を森林保全計画にどのようなかたちで反映させることができるのかという点は、今後の研究においてもっとも着目すべき点である。それについては、本研究にひきつづいて採択された科研費にて、継続して研究をすすめていく予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計5件)

① Yasuoka, H. 2012. Fledging agriculturalists? Rethinking the adoption of cultivation by the Baka hunter-gatherers. *African Study Monographs Supplementary Issue*, 43: 85–114. (査読有)

<http://jambo.africa.kyoto-u.ac.jp/kiroku/asm_suppl/abstracts/pdf/ASM_s43/5.%20YASUOKA.pdf>

② Yasuoka, H., Kimura, D., Hashimoto, H. & Furuichi, T. 2012. Quantitative assessment of livelihoods around Great ape reserves: Cases in Luo Scientific Reserve, DR Congo, and Kalinzu Forest Reserve, Uganda. *African Study Monographs Supplementary Issue*, 43: 137–159. (査読有)

<http://jambo.africa.kyoto-u.ac.jp/kiroku/asm_suppl/abstracts/pdf/ASM_s43/7.%20YASUOKA%20et%20al..pdf>

③ Kimura, D., Yasuoka, H. & Furuichi, T. 2012. Diachronic changes in protein acquisition among the Bongando in the Democratic Republic of the Congo. *African Study Monographs Supplementary Issue*, 43: 161–178. (査読有)

<http://jambo.africa.kyoto-u.ac.jp/kiroku/asm_suppl/abstracts/pdf/ASM_s43/8.%20KIMURA%20et%20al..pdf>

④ Yasuoka, H. 2009. Concentrated distribution of wild yam patches: Historical ecology and the subsistence of African rainforest hunter-gatherers. *Human Ecology*, 37(5): 577–587. (査読有)

<doi: 10.1007/s10745-009-9279-5.>

⑤ Yasuoka, H. 2009. The variety of forest vegetations in southeastern Cameroon, with special reference to the availability of wild yams for the forest hunter-gatherers. *African Study Monographs*, 30(2): 89–119. (査読有)

<<http://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/dspace/handle/2433/79539>>

〔学会発表〕(計2件)

① Yasuoka, H. 2010/5/11. Semi-domesticated yams (*Dioscorea* spp.) in a national park, southeastern Cameroon. 12th International Congress of Ethnobiology. Tofino, British Columbia, Canada.

② 安岡宏和. 2010/3/13. GPS を利用して描く Baka Pygmies の森林利用の季節変異と多様性. 京都大学アフリカ地域研究資料センターシンポジウム: コンゴ盆地森林居住民の文化と現代的課題. 京都大学.

〔図書〕(計11件)

■編著書

① Ichikawa, M., Kimura, D. & Yasuoka, H. (eds.) 2012. Land Use, Livelihood, and Changing Relationships Between Man and Forests in Central Africa. (Supplementary Issue of African Study Monographs, No.33). Center for African Area Studies, Kyoto University. 178p.

② 安岡宏和. 2011. 『バカ・ピグミーの生態人類学—アフリカ熱帯雨林の狩猟採集生活の再検討』京都大学アフリカ地域研究資料センター/松香堂書店. 224p. (単著)

■分担執筆

③ 安岡宏和. 2012. 純粹贈与されるゾウバカ・ピグミーのゾウ肉食の禁止とシェアリングをめぐる考察. 松井健・野林厚志・名和克郎(編)『生業と生産の社会的布置—グローバルバージョンの民族誌のために』岩田書院. pp. 301–341.

④ 安岡宏和. 2012. 「森の民」の生態人類学—身体的実感のフィールドワークを通して. 小島聡・西城戸誠(編)『フィールドから考える地域環境—持続可能な地域社会をめざして』ミネルバ書房. pp. 140–160.

⑤ 安岡宏和. 2011. GPS のボタンのおし方—生態人類学フィールドワーカーの場合. 古澤拓郎・大西建夫・近藤康久(編)『フィールドワーカーのためのGPS・GIS入門』古今書院. p. 50.

⑥ Ichikawa, M., Hattori, S., and Yasuoka, H. 2011. Environmental knowledge among central African hunter-gatherers: types of knowledge and intracultural variations. In Whallon, R., Lovis, W. A., and Hitchcock, R. K. (eds.) *Information and Its Role in Hunter-Gatherer Bands*. Cotsen Institute of Archaeology. pp. 117–132.

⑦ Yasuoka, H. 2010. The wild yam question: Evidence from Baka foraging in the northwest Congo Basin. In Bates, D.S., & Tucker, J. (eds.) *Human Ecology: Contemporary Research and Practice*. Springer. pp. 144–154.

⑧ 安岡宏和. 2010. ワイルドヤム・クエスチョンから歴史生態学へ—中部アフリカ狩猟採集民の生態人類学の展開. 木村大治・北西功一(編)『森棲みの生態誌』京都大学学術

出版会. pp. 17-40.

⑨安岡宏和. 2010. バカ・ピグミーの生業の変容—農耕化か?多様化か? 木村大治・北西功一(編)『森棲みの生態誌』京都大学学術出版会. pp. 141-163.

⑩安岡宏和. 2010. バカ・ピグミーの狩猟実践—毘獵の普及とブッシュミート交易の拡大のなかで. 木村大治・北西功一(編)『森棲みの生態誌』京都大学学術出版会. pp. 303-331.

⑪木村大治・安岡宏和・古市剛史. 2010. コンゴ民主共和国・ワンバにおけるタンパク質獲得活動の変遷. 木村大治・北西功一(編)『森棲みの生態誌』京都大学学術出版会. pp. 333-351.

[その他]

ホームページ

<https://sites.google.com/site/hirokazuyasuoka/>

6. 研究組織

(1)研究代表者

安岡宏和 (YASUOKA HIROKAZU)

法政大学・人間環境学部・講師

研究者番号: 20449292